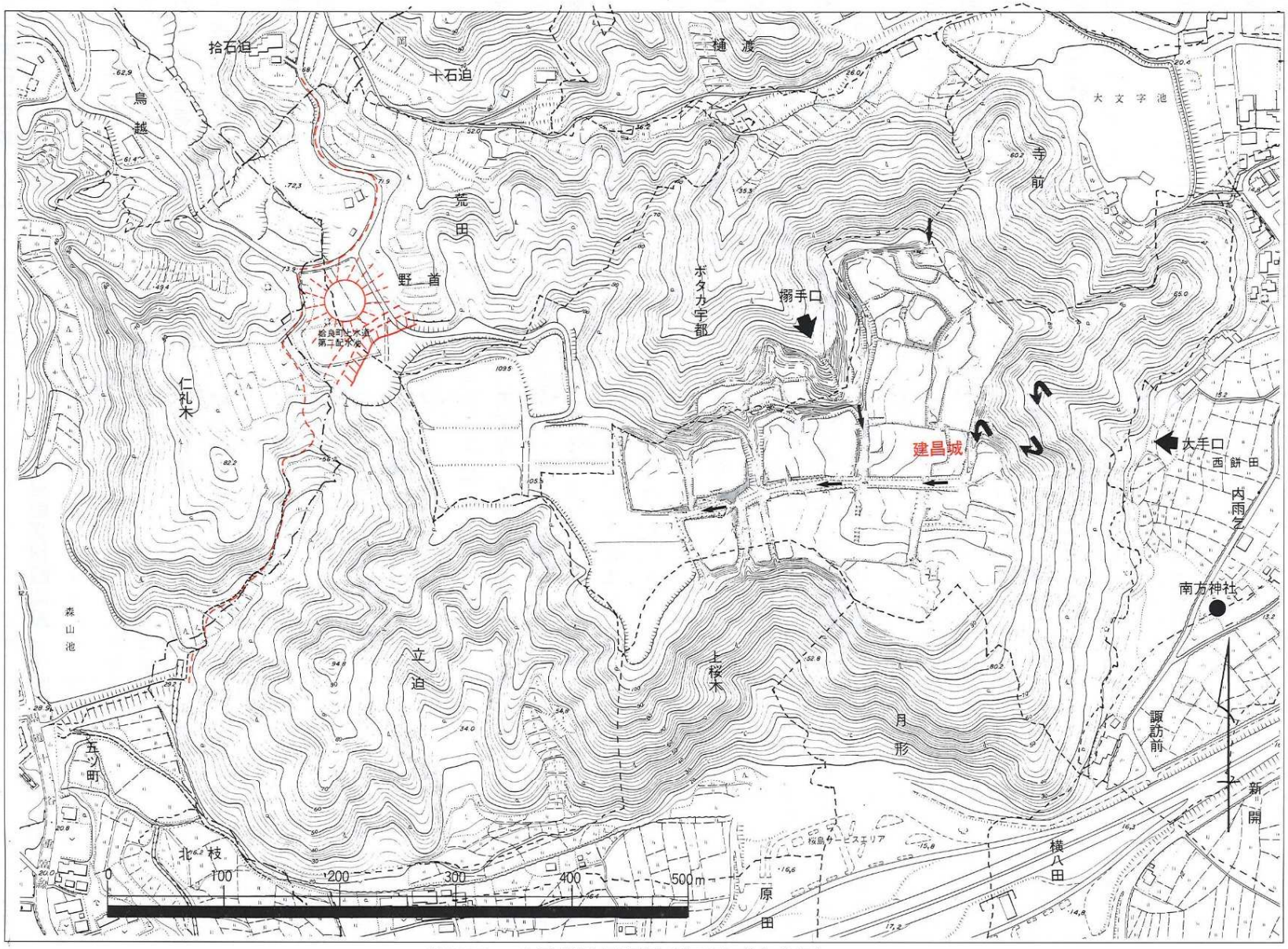


第18図　建昌城跡周辺地形図及び小字図

建昌城へ至る道筋は，現在北東にある大文字池南側から登る山道がある。この山道は，途中何か所か崩壊しているが，Ａまで達すると大きくＢへ折れる。Ｂ地点は巨石が枡形状に配置してあり，ここが大手口と考えられる。このＢ地点には，以前多数の石組が見られたが，材木搬出のため破壊されたと言う。ＢからＲにかけては，曲輪１と曲輪10に挟まれた空堀１が始まる。比高差は約５ｍある。建昌城には，山頂部から斜面部にかけて，現在32か所の曲輪が確認されている。これらは大きく曲輪群Ⅰ～Ⅶに大別される。以下この曲輪群を順番に解説する。

［曲輪群Ⅰ］　空堀１はＢから直進してＲで西に折れる。曲輪群Ⅰは曲輪10・11と共に大手口に対する備えとして，北から南へ曲輪１～６が階段状に配置されていると考えられる。土塁13は自然地形の削り残しであるが，土塁ととらえた。また，南斜面には曲輪31・32がある。

［曲輪群Ⅱ］　空堀１は典型的な箱堀であり，わずかに屈折しながら西へ延びる。この空堀１は地区民からは馬乗り馬場として親しまれている。空堀１の南側には，空堀３・空堀５を境とする曲輪群Ⅱがある。曲輪７は120ｍ×63ｍの城内で最大の規模であるが，確認調査の結果，南北に走る空堀14が推測されている。空堀４は深さ約１.4と浅く，空堀１とは接続しない。

［曲輪群Ⅲ］　空堀１と空堀８に区切られた城の北東部には，曲輪10～19からなる一群がある。曲輪15はこの曲輪群の中心であり，周囲を土塁４に囲まれ，東に開口部がある。曲輪15の東部及び北部には，不整形の曲輪が階段状に配置してある。曲輪10・11・14は直線的であり，曲輪14は66ｍ×52ｍの規模である。曲輪12の北東斜面には，尾根を切断する空堀が４本確認できる。［曲輪群Ⅳ］曲輪20には東と南に土塁７～９があり，中央の空堀９から北側斜面へ降り，曲輪27～30が搦手口を守る。空堀９は土塁を備えたＧを経由して，空堀10に達する。空堀10を北へ下ると，曲輪29に至る。Ｆは搦手口の正面にあたる切岸であり，高さ約８ｍを計る。

［曲輪群Ⅴ］　空堀５・10によって区画された曲輪群Ⅴ・Ⅵは，全体的に一段高い位置にあり，空堀１は土塁10・11によって隘路となり，約２ｍの段差がある。この区域は城内で最も重要な区域であったと推測される。空堀16は現在埋もれているが，地区民の証言や確認調査により，その存在が予想される。曲輪群Ⅴはこの空堀16の南にある。曲輪24は旧ヒナセンター造成工事により，大規模な削平を受けており，築城時は曲輪21とほぼ同レベルであったと想像される。

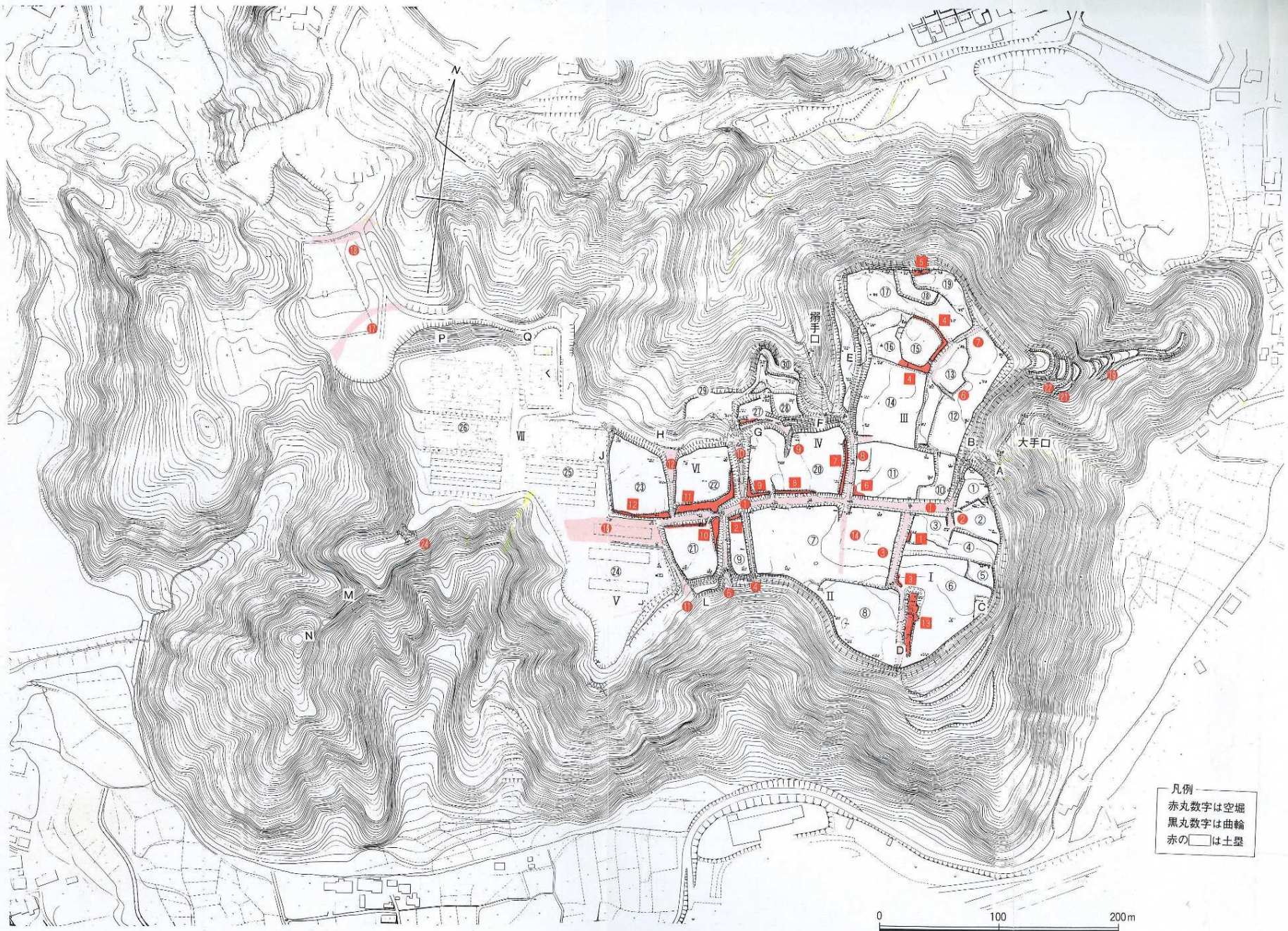
曲輪21の南斜面には，平坦地Ｌが残る。空堀11は北半分が破壊されている。

［曲輪群Ⅵ］　曲輪群Ⅵは中央の空堀12を境に東西に曲輪22・23からなり，曲輪23が一段高い。曲輪22には城内で最大規模の土塁11がある。空堀12の北端では絶壁となる。

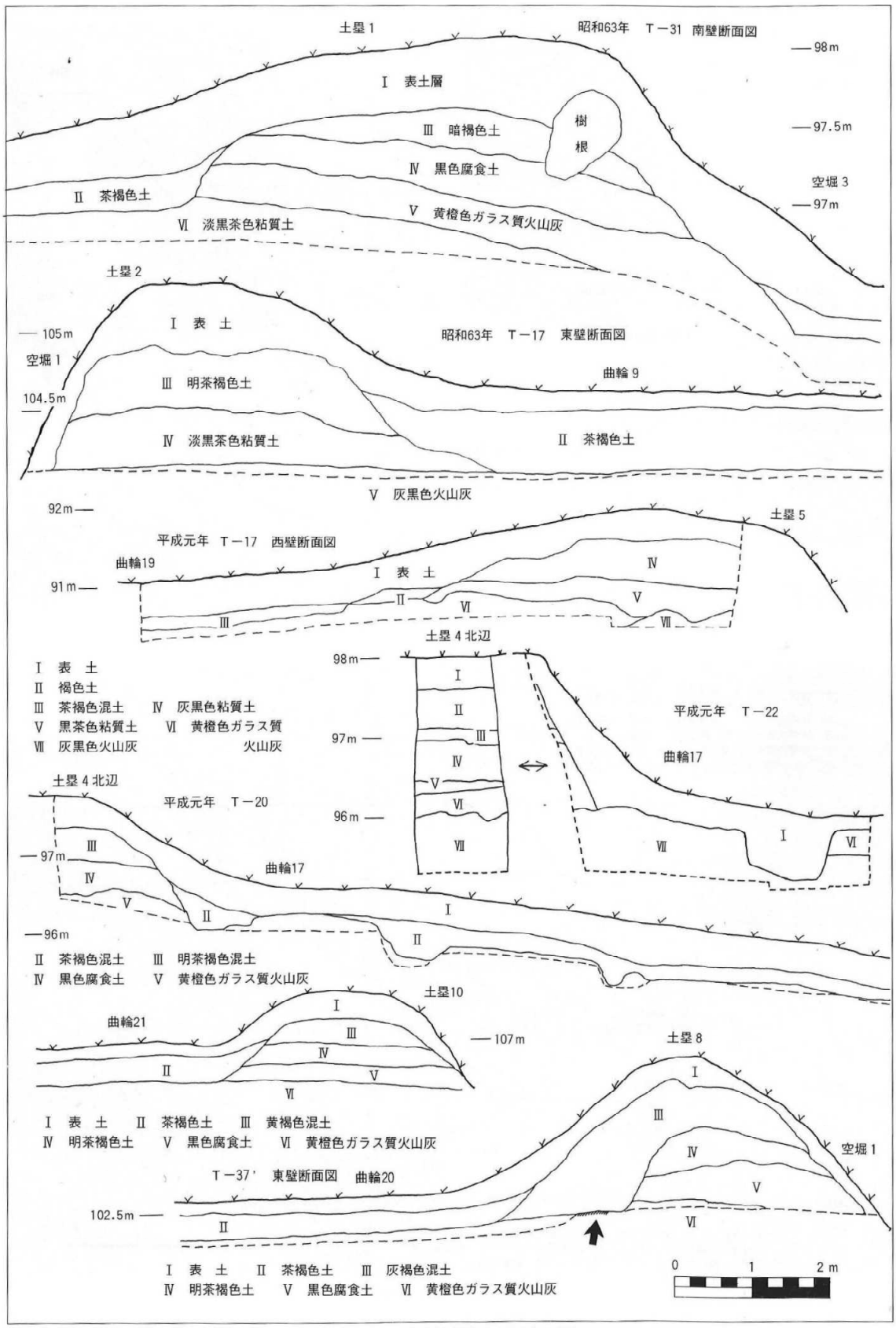
［曲輪群Ⅶ］　この一群は，便宜上南北に走る現道を境に区分したが，共に破壊を受けているため，築城時の姿は不明であるが，曲輪26の北側が城域全体の最頂部であったと考えられる。なお，旧事務所跡Ｋ地点は斜面の造成による平坦地である。

曲輪26の南西には，尾根を断ち切る空堀24が確認された。その延長線には馬の背状のＭがあり，Ｎへ至る。また，曲輪26の北西には，以前小丘陵があり，尾根からの進入を遮る空堀17があったという。さらにその小丘陵北西には，連続する丘陵を断ち切る空堀18（切り通し）があったといわれる。しかし，現在は上水道配水地工事と県道改良工事により，大規模に破壊され，原地形をとどめていない（昭和54年　小幡　晋「南九州の城址」参照）。

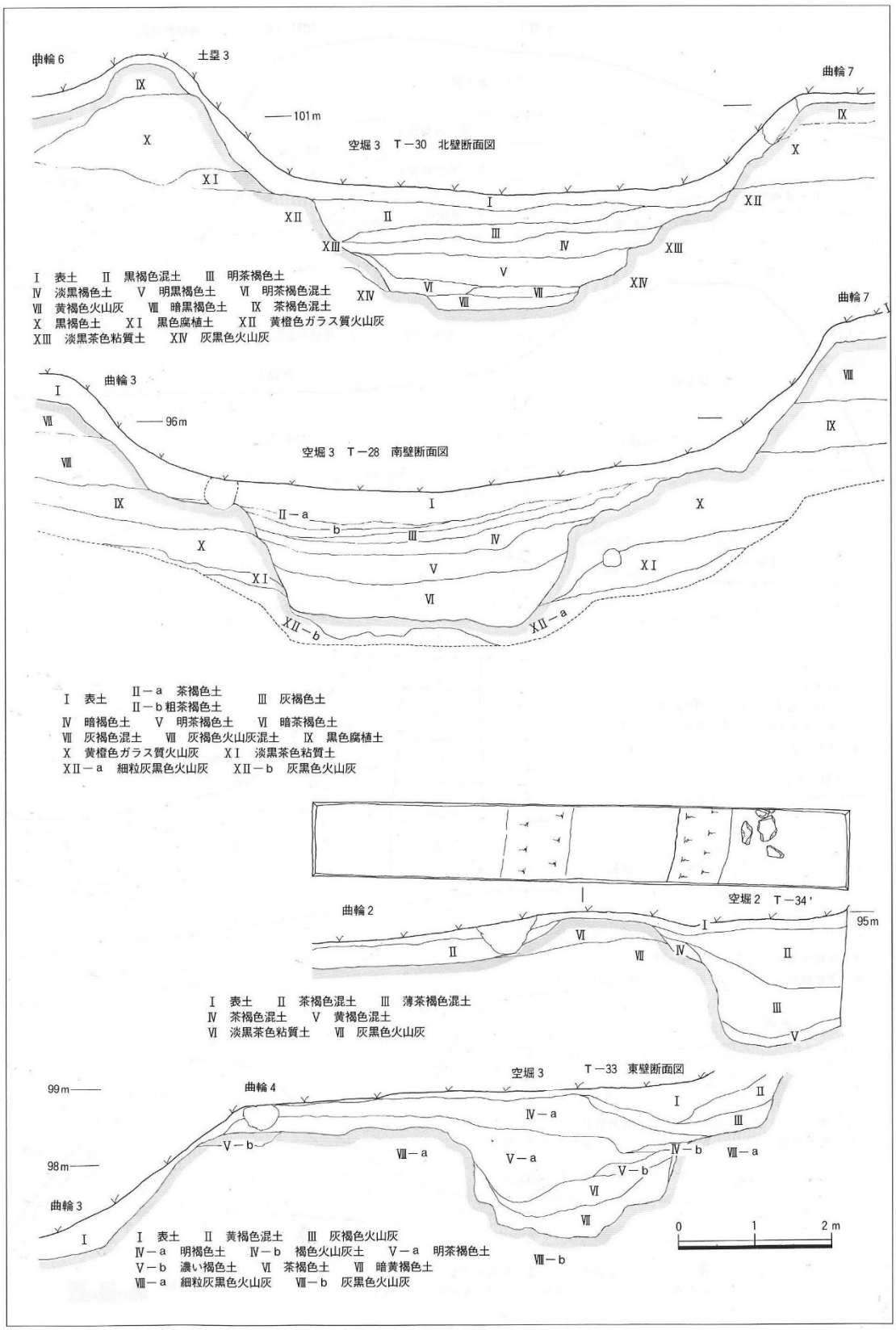
なお，**第20図土塁断面図**及び**第21図空堀断面図**については，紙数の関係で詳述できなかった。**第19図**と対照しながら各遺構の規模について，ご参考にして頂ければ幸いである。**第20・21図**は「姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）建昌城跡」からの転載である。



第19図　建昌城跡実測要図（折込み）



第20図　建昌城跡土塁断面図



第21図　建昌城跡空堀断面図

▲大手口から空堀1 ▶搦手口（左へ折れる）
◀大手口（ポール奥は桝形となる）

▶曲輪22

▲空堀1　　曲輪9▲

写真10　建昌城跡大手口・搦手（からめ）口

◀曲輪15

曲輪13▶

▼曲輪16

写真11　建昌城跡各曲輪

▲曲輪11

▲曲輪10

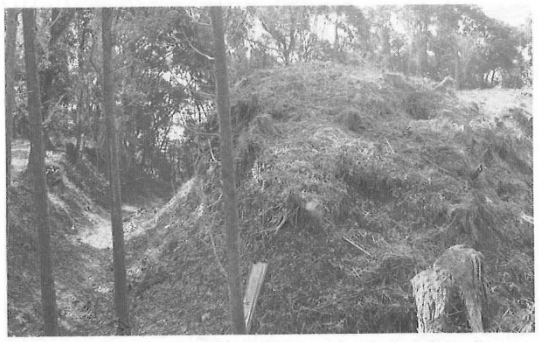
▽曲輪20の各土塁

▲東側土塁

▲東側土塁を南から望む。（右手は空堀８）

▲土塁８・９（左手は馬乗り馬場）

▲土塁９（北側斜面）



▲土塁10（北から南を望む。左手は空堀５）

◁▷曲輪21

▲土塁10西側面（南から北を望む。）

▲土塁11南側

◁▷曲輪22

▲土塁11東側

写真12　建昌城跡各土塁

8　山　田　城　　所在地　上名　字中ノ城他

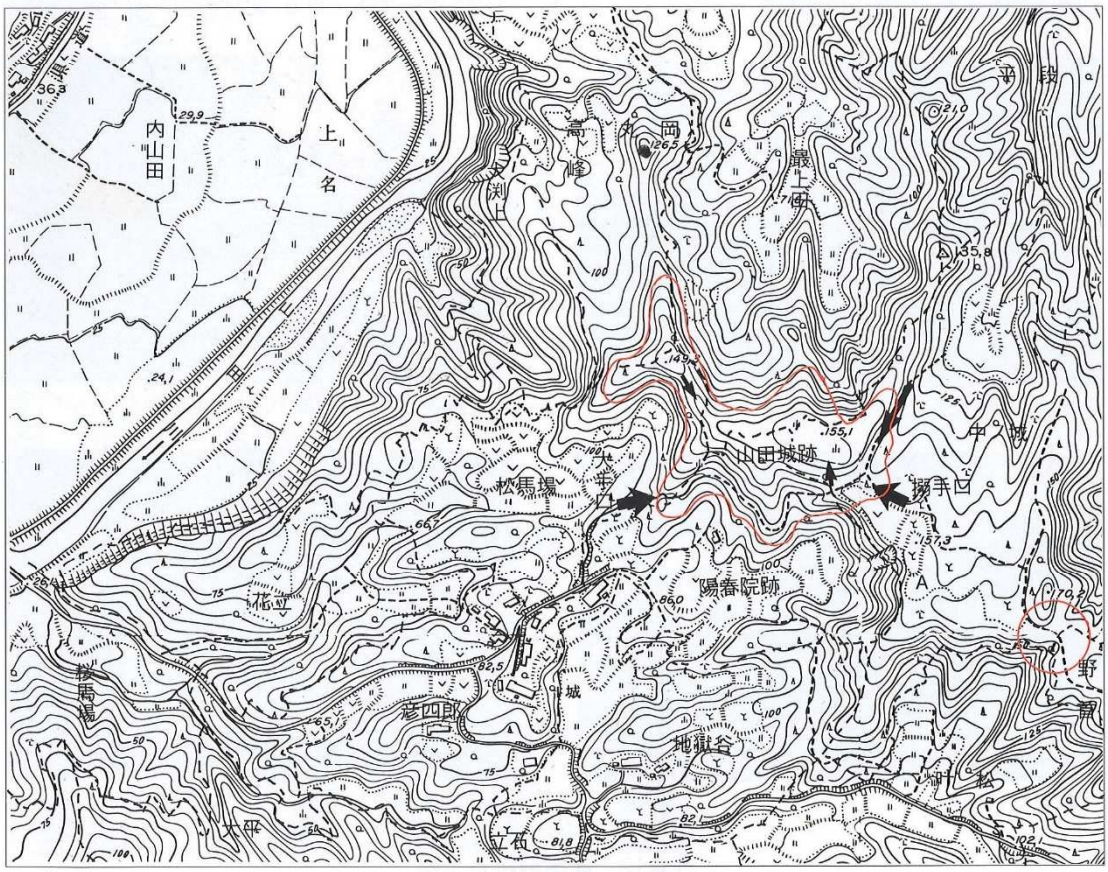
写真13　山田城跡遠景（西から望む）

山田城は，上名の内山田を一望できる高台の山中にある。南には山田城に由来すると思われる城集落がある。また，**第22図**によれば，山城に関係する小字も桜馬場・松馬場・中ノ城・上名野首と多い。城域の枢要部は**第22図**中の赤線内であり，円内の野首部は外郭に相当する。

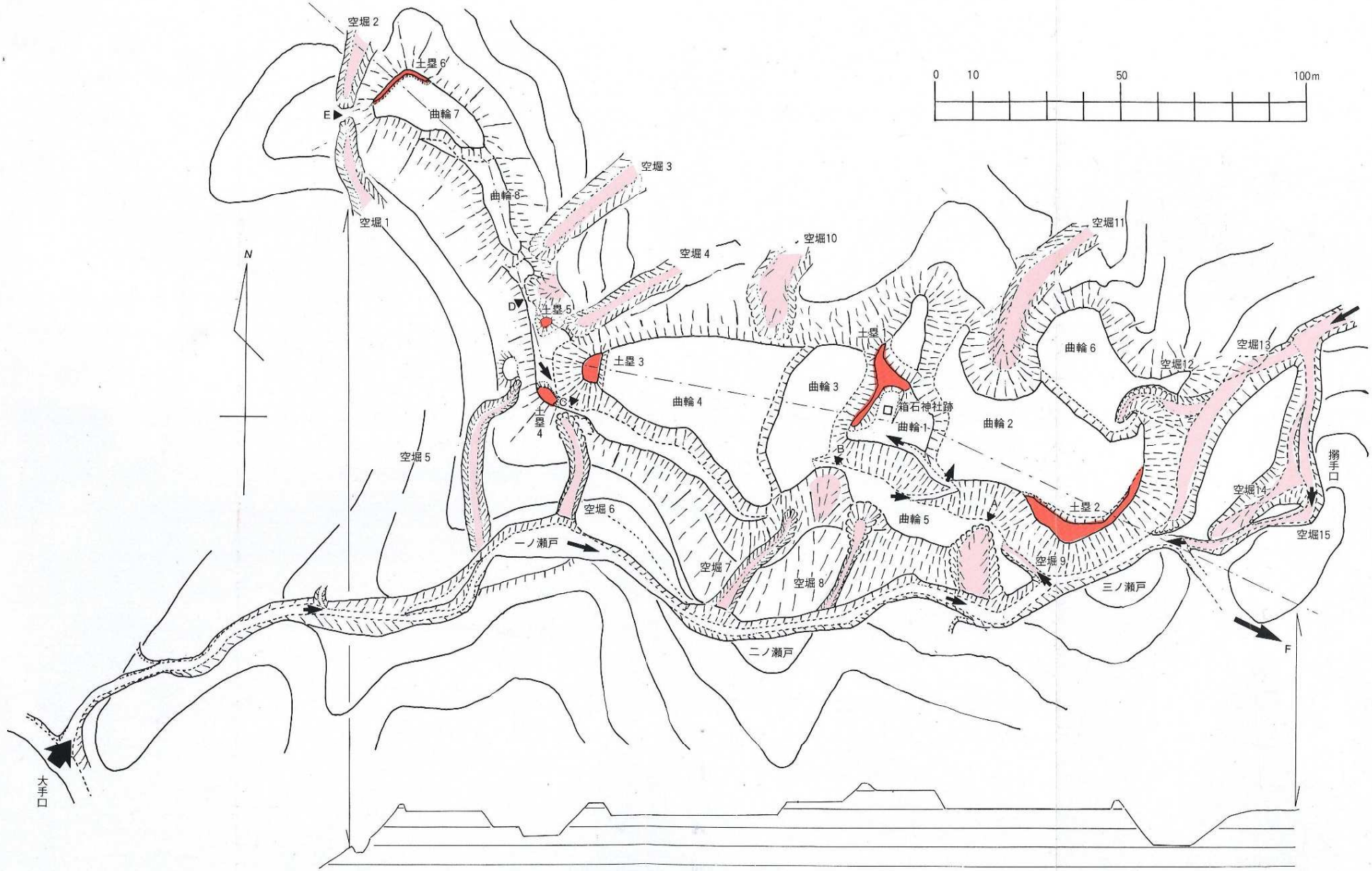
城の南の陽春院跡は，江戸時代の寺院「陽春院」があったところである。

山田城へは，桜馬場から城集落を抜け，大手口から一の瀬戸，二の瀬戸を経て城中に至る。この山道は，城中へ入らず，そのまま搦手口・野首を抜けると，加治木町菖蒲谷を経由して辺川に至る。大字辺川は昭和27年10月まで当時の山田村の飛び地であった。また，野首から加治木町境の尾根伝いを南へ下ると平山城へ至る（約３km）。

山田城では，戦国時代に島津氏と祁答院・蒲生両氏との間で激しい戦闘が行われた。弘治３(1557)年には，島津貴久により平定され，山田には梅北国兼が配置された（第２章９　参照）。



第22図　山田城跡周辺地形図及び小字図



第23図　山田城跡実測要図（折込み）